春秋彩

Syunjusai

特集
「防災・減災の取り組み」 …… 2

活躍する卒業生 …… 7
国際交流 …… 8
研究活動紹介 …… 10
大学の動き …… 12
後援会便り …… 13
活き活き元気種 …… 14
熊本県立大学未来基金寄附者ご芳名 …… 15
人事情報 …… 15
おすすめの1冊 …… 15

熊本県立大学広報誌
2013 SPRING
vol.38

熊本県立大学

春秋彩とは
万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

あいさつ

学長
古賀　実

大学に対する社会の期待、要望は年々高まりを見せています。「大学は社会が求める人材の育成にその役割を充分に果たしていないのでは」との厳しい指摘もなされています。社会の変革の原動力となるべき人材の育成、国難ともいえる大災害からの復興をはじめ、これからの日本を支える若者の育成に、これまで以上に高い教育力が大学に求められています。

大学教育改革は個々の大学において、大学の理念、伝統、背景、人材養成の目的に沿った形で、真摯に進められています。熊本県立大学では、地域との連携をもとに様々な取り組みを展開し、教育、研究の分野で成果を上げてきました。大学教育の先進的改革のモデルとされる文部科学省補助事業に、本学では現在二つのプロジェクトが進められています。産業界との連携をもとにした人材育成プログラムはこれからキャリア教育の学習成果評価手法の開発という難問に挑戦して行きます。また、熊本県内四大学の連携で進められる「減災型地域社会のリーダー養成プログラム」では本学の特色を充分に生かした教育プログラムの構築をめざしています。皆様のご協力、ご支援をお願いします。

特集「防災・減災

理事長　五百旗頭　真

18年前の阪神淡路大震災の時、私は神戸大学教授だった。私のゼミ生の森君を含め39名の神戸大学生が犠牲となり、西宮市の私の自宅も全壊となった。大地の魔神がわが家を引き裂き、家族を皆殺しにしようとしている。殺意を感じたが、幸いにも2階のベッドで寝ていた家族は皆無事だった。

妻と娘2人は広島の親しい家族中島さん宅に招かれ、引き取られた。疎開生活は常に厳しいものと聞く。私は1ヶ月後、神戸大学の暇を得て広島を訪ねた。とてもよくしてもらい、妻子は楽しそうであった。翌朝、6歳の末娘を近所のお姉さん達が迎えに来た。なんと小学1年生の娘は己斐上小学校へ通わせてもらっていた。お姉さん達とはずむように道を登っていく娘のうしろ姿を見て、私は思わず涙した。遠く広島の人たちも被災地をこんなに暖かく支えてくれている。神戸は見捨てられていない。全国の人々に守られているのだ。

の取り組み」

東日本大震災の復興構想会議の議長に任命された私の第一方針は、同じことを東北の被災地にすることであった。不可能をするとはいわないが、出来る限りのことをする。被災者を見捨てず、今を生きる全国民の連帯と分ち合いによって支える。

阪神淡路大震災の現場にあって6千名もの人々が亡くなった時、こんなひどい災害は2度とあるべきではないと思い、震災の教訓と復興に取り組んだ。だが2万人近い犠牲を招く東日本大震災の襲撃を受けた。これで終ったわけではない。日本列島は地震活性期にあり、地球温暖化とあいまって、次なる大災害をわれわれ世代は見ることになろう。

2つ強調したい。1つは、日本中天災から自由な地はない。どこでも誰でも被災者となりうる。しかしどこがやられようとも、日本国民は被災地を見捨てず、支え抜く。その信頼をこの国は確立すべきである。

もう1つは、大自然が猛威を振う時、完全な防災はありえない。人に可能なのは減災努力のみである。減災手段の地道な組み合せこそが悲惨からの救いを可能にする。

熊本県立大学が防災・減災へ一歩を踏み出すことを、心から嬉しく思う。

防災・減災に向けた人材育成

総合管理学部　総合管理学科　准教授　澤田　道夫

熊本県立大学では、安全安心な社会の実現のため、防災・減災にかかる知識を身につけた地域の核となることができる人材の育成に取り組んでいます。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災や、平成24年7月に九州北部を襲い熊本県にも大きな被害を出した豪雨災害は、減災への備えの必要性と、地域における日頃からの防災対策の重要性を再認識させるものでした。これまで、我が国においては、行政を中心としたハード整備による防災対策が行われてきました。しかし、このような巨大災害においては、行政の取組だけでは対応することができません。今必要とされているのは、学生の皆さんも含めた住民一人ひとり、そして地域のコミュニティが協働し助けあうことで、被害を減らし人命を守っていくような、減災型地域社会の実現に向けた仕組みづくりです。

そこで本学では、非常時に地域の減災リーダーとして活躍できるような人材を育成すべく、防災・減災に向けた実践的な教育に取り組んで行くこととしています。このような取組の一つとして、現在、熊本県内の4大学の連携による「減災型地域社会のリーダー養成プログラム」の開発を進めています。これは、本学のほか、熊本大学（代表校）、熊本学園大学、熊本保健科学大学の国公私立4大学で行うもので、文部科学省から「大学間連携共同教育推進事業」として認定を受けています。この取組の推進のため、グローカルセンター1階に「減災型教育プロジェクト室」を設置し、専任の職員を配置するなど、体制整備を進めています。来年度以降、①減災型地域社会をテーマとした共同学修プログラムの構築、②単位互換・地域運営協議会・eポートフォリオを活用した教育の質保証、③減災リーダー認定制度の創設など、順次プログラムの充実を行っていく予定です。

阿蘇災害復興ボランティア

「減災型地域社会のリーダー養成プログラム」4大学合同会議

今後、大学の地域における防災拠点としての体制の一層の充実を図るとともに、様々な講義において防災・減災に関する知識の提供に務めていきます。また、これらのノウハウを大学内だけにとどめるのではなく、CPD講座の開設や医療・行政など他の機関との連携を通じて、広く社会に還元していきたいと考えています。

3月5日のキックオフシンポジウム

防災食“災害時の食生活支援”

地域連携センター　食育推進プロジェクト　特任教授　本田　榮子

阪神・淡路大震災以来、東日本大震災、昨年7月の熊本大水害等と、自然災害の発生は予測もしないスケールで私たちの生活に不安と衝撃を与えています。また、各地で大規模災害も予測されています。

“命と健康を守るための食生活支援体制”の必要性を感じ、日本公衆衛生協会の支援を受け研究班を設け、平成17年より食支援体制整備のための検討を重ねて来た中で、災害時の管理栄養士の役割が明確になってきています。頻発する自然災害現場に遭遇した管理栄養士からは、特定疾患や難病、食物アレルギー性疾患、慢性疾患の悪化により“普通の食事が食べられない住民”が思いのほか多くいるという声を聞き、また、有事における栄養・食生活支援活動を円滑に進めるためには、関係団体ボランティア等との連携や、民間企業との食料物資支援協定等、平時からの取り組みが大切であることもわかりました。平成18年に「災害時の食支援体制ガイドラインを作成、各地で災害を想定したガイドライン検証のための研修も行ってきています。

「食事」は身体に必要な栄養を補給するだけでなく、不安やストレス、疲労を解消する効果もあり、温かい食事こそが健全な心身と、心豊かなコミュニティをもたらしてくれる大切なものであることを常に意識して、必要な人に適切な食事が提供できる体制が重要です。

私は本学で学生に「東日本大震災の復興活動に食の専門家として出向いた時、どの様な食生活支援ができますか」とレポートさせていますが、様々で、ボランティア等での体験も少なく共助の視点が不充分でした。

備蓄食料例

災害発生時には（公助）だけでは限界があります。自分の身を自分で守る（自助）、近隣で助け合う（共助）ことにより、平時から地域全体を災害から回避するための体制が必要です。学生にも日頃から災害に対する意識や、行動力を持ってもらうため、本学では「食育の日」を利用した取り組みも行っています。自分と周りの人の命を守ることが出来る力と技（スキル）を身に

食育の日のメニュー

防災時の食について説明する本田特任教授

つけ、どんな状況でも安全に食べることが出来る力、手元に残った食材で命をつなぐ技を身につけることが出来る事を目的に、今年度最後の食育の日を「防災と食」をテーマに“避難所で提供するあったか食”を減災型地域社会のリーダー養成プログラムと併せ実施しました。あったか食を150食提供し、同時に防災に関するアンケートを実施しました。

日頃から災害時の食料の備蓄等の準備をしているのは約3割にとどまっていました。食料備蓄は水、インスタント食品、缶詰等で“カンパン”をはじめて食べた学生も多かったようです。防災に関する専門知識を学ぶ機会があれば参加したいとの回答が約9割近くあったことから、非常食を教材とした防災の啓発活動が、学内から地域へと“食で命を繋ぐ”架け橋になればと思っています。

地震に強い木造建物を目指して

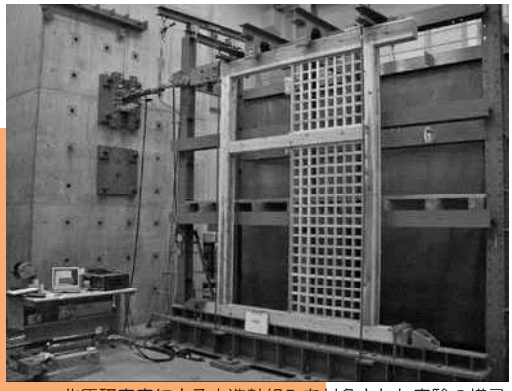
環境共生学部　居住環境学科　教授　北原　昭男

東日本大震災においては、巨大な津波によって甚大な建物被害・人的被害が発生しました。津波によって多くの建物が破壊された映像は未だに記憶に新しいかと思います。それでは、18年前に発生した阪神淡路大震災による被害については如何でしょうか。今となっては記憶の片隅に追いやられてしまった感もあるかと思いますが、この震災では地震による激しい揺れによって、阪神間の人口稠密地域で多くの建物が倒壊し、これを主原因として6000人を超える人命が失われました。また、建物被害に起因して様々な都市型の被害が発生し、莫大な経済損失が生じました。

東日本大震災における10mを超える巨大な津波に対しては、木造建物は無力に等しいものです。このような津波による様々な被害を最低限に抑えるためには、避難ビルなど防災施設の配置を見直すなど地域の防災力を高めること、発災時の応急体制・避難体制を整えることなどの対応が重要になるものと考えられます。一方で、阪神淡路大震災における地震被害の軽減に関してはどのように考えればよいでしょうか。

東日本大震災における建物の被害
（左は倒壊を免れたコンクリート造建物、右の空き地は流失した木造建物の跡）

この地震による木造建物被害の特徴は、古く耐震性の低いものが、都市直下で発生した地震の激しい揺れによって大きな被害を受けたことです。また、その原因として、古い耐震規定の不十分さ、施工精度の悪さ、建物の老朽化などが挙げられています。逆に言えば、これらの原因を取り除けば木造建物の倒壊を防ぐことができ、様々な被害を軽減することが可能となるはずです。



北原研究室による木造軸組みを対象とした実験の様子

木造建物の耐震性能向上に関する研究は他の構造に比べて遅れていたのですが、阪神淡路大震災以降ようやく研究が進み始め、2000年に建築基準法における構造規定等が改定されました。これにより、耐震性の高い木造住宅を供給できる体制が整ってきましたが、木造建物の種類・構造は多岐にわたり未だに十分とはいえない状況です。一方、すでに都市域に建てられている古い木造建物群については、できるだけ早く耐震性を向上させていかなければ都市全体の地震時安全性も向上しません。

居住環境学科木質構造研究室（北原研究室）では、木造建物の耐震性向上さらには安全な街づくりを目指して、現代構法・伝統的構法などの種々の構法による木造建物の耐震性能評価のための実験、都市・地域に存在する木造建物の耐震性能調査、既存建物に対する耐震診断・補強を進めるための方策などの研究を進めています。

阪神淡路大震災などの内陸型地震は全国いたるところに存在する活断層によって引き起こされます。これから数十年の間に、この様な地震が皆さんの近くで起こる可能性は否定できるものではありません。これを機会に、お住まいの建物を初めとして身の回りの安全性に関して意識を持って頂ければ幸いです。

阪神淡路大震災における木造建物の被害

活躍する卒業生

さまざまな分野で活躍する熊本県立大学の卒業生を訪ね、
現在のお仕事や、ご自身の学生時代について、語っていただきます。

患者様が元気に笑顔で
退院される姿を見ると、
とても嬉しくやりがいを感じます。

大腸肛門病センター高野病院
栄養科　管理栄養士
池上 奈津子さん

Profile

2009年3月　熊本県立大学　環境共生学部　環境共生学科　食・健康環境学専攻卒業
同年4月　大腸肛門病センター高野病院　栄養科　入職
2012年4月　熊本県立大学　環境共生学研究科　博士前期課程入学

現在の仕事内容

高野病院で管理栄養士として働いて4年が経ちました。主な仕事は給食管理業務、栄養指導、栄養教室、栄養管理計画書の作成などです。疾病と栄養に関する専門的な知識が必要となりますので日々勉強は欠かせません。患者さまはそれぞれライフスタイルや必要エネルギー量などが異なりますので、個々に応じた栄養管理が必要となります。

なかなか栄養状態の改善が見られない難しい症例もありますが、スタッフ間で情報交換や話し合いを重ね、治療効果がみられて患者様が元気に笑顔で退院される姿を見ると、とても嬉しくやりがいを感じます。患者様の人生には様々なイベントがあり、いろんな思いを抱えて病院に来られます。医療は患者様に少しでも元気なっていただくお手伝いをする仕事ですが、かえって私の方が元気をいただいている気がします。

学生時代の過ごし方

私は病院の管理栄養士を目指していたので、大学の先生のご協力のもと、必須の臨地実習以外に3か所の病院に自主的に実習の依頼を行い、実習させていただきました。特色の違う病院を見ることでそれぞれの栄養管理の違いが分かり、自分がどういう病院に進みたいか考えることができました。また何人もの管理栄養士の先生とお話しすることができ、多くのアドバイスをいただきました。今でも学会や研修会でお会いすることがあります。自主的な実習に行ったことは今でも役に立ち、本当に良い経験となりました。

私は昨年から病院の協力のもと大学院に通っています。病院で働いて2年が経ち、難病であるクローン病にもっと良い栄養療法がないだろかと考え、研究したいと思うようになりました。私が学生の頃在籍していた研究室の先生はクローン病や腸管免疫について専門にされていたので、熊本県立大学への進学を決めました。仕事と学業の両立は大変ですが、周りの方に支えていただいて順調に進んでいます。大学生活は自分次第でいくらでも濃いものになります。是非色んなことにトライして有意義な学生生活を送っていただきたいと思います。

国際交流 INTERNATIONAL

～世界を学ぶ、海外と交流する～

海外研修報告

実り多き研修を終えて

総合管理学部　2年　野口 涼子

この1ヶ月は、英語ばかりに囲まれた生活を送った。レッスン時はもちろん、研修の連絡事項も、日常会話からバスや電車のアナウンス・ポスターなどの貼り紙も全て英語。そして初めての海外である私にとって、英語圏の人との生のコミュニケーションは、特にわくわくした。

5時間と12時間のフライトを終え、イギリスでの研修が始まった。そのほとんどはBathという町で行われた。私たちは1ヶ月のうちの約2週間をBathで過ごし、そこではホームステイをしながらセンターに通い、本格的な英語レッスンをするという毎日であった。ここでのレッスンは、4・5人の班で毎回ある議題について議論するものだった。議題はUrban parks, Volunteering, Education System, Universityなどさまざまである。時には、自分とBathの学生の面白い経験を話し合った。昼のレッスンでの会話に加えホームステイ先での朝・晩の会話で、2週間脳をフル回転させ続けた。つらいと感じる時もあったが、地元の学生は簡単な単語を選んでくれるし、ホストファミリーは本当にジョークが好きで、その優しさとゆかいな会話に救われていた。また、自分の英語が少しずつ上達していくのも分かるようになり、最後はすごく楽しくレッスンを終えることができた。

長いと思っていた研修はあっという間に過ぎ、私は日本に帰ってきた。イギリス人の口癖を覚えたり、日本で習ってきたものよりも別の単語や言い回しの方が普通に使われることを知ったりと、学ぶものは単に文法や発音だけではなかった。レッスンの合間に訪れた数々の観光地は、私の一生の宝物になった。驚いたのは、この1ヶ月で自分がいくつ訪れたか分からない程多くの世界遺産を訪れていたということだ。イギリスは自然が豊かで気候も心地良く、人々が広場で歩いたり寝転んだりしたくなる気持ちがよく分かった。果物や野菜も新鮮で食事を楽しむこともできた。

毎日必ずネイティブな英語に触れるということは、日本に住んでいれば決して経験できないことで、私はこの経験ができたことを誇りに思う。本当に行ってよかった。1ヶ月間イギリスで過ごすうちに、いつのまにか英語に触れることは当たり前になっていた。今日本にいて、英語が普段から身の回りにないことが少し変だと感じる程だ。この研修で鍛えてきた英語を衰えさせないために、これから毎日積極的に英語に触れる生活をしたい。そして必ずまた、イギリスに行きたいと思う。

ロンドンにて仮装した方と

ビックベン

地元学生との交流

EXCHANGE

世界に伸びる大学を標榜する本学では、「国際性の推進」を三大理念のひとつに掲げています。その理念をより具体化するため「国際交流ビジョン」を策定し、「学生」「学術研究」「地域」それぞれの視点から全学的に国際交流活動を推進しています。

学術交流報告

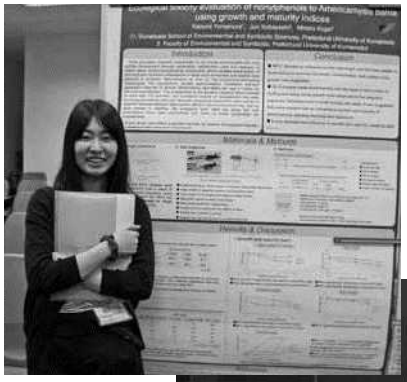
台北科技大学との国際交流

環境共生学研究科　博士前期課程　1年　米村 香純

昨年の9月に、私は環境分析化学研究室と水環境科学研究室のメンバーと一緒に台湾へ行き、台湾の国立台北科技大学と学術交流を行ないました。その際に、台北科技大学を訪問し、研究テーマの発表を英語で行いました。台湾には5日間滞在し、発表以外に台湾のゴミ処理工場や環境に関わる企業を見学したり、台湾の学生に台北市内を案内してもらいました。

発表においては、口頭発表とポスター発表の両方を行いました。スライドや原稿、ポスターを作成することで、効果的なプレゼンテーション技術を身につけることが出来ました。また、発表したことで国際発表を経験したという自信を持つことが出来ました。

台北科技大学の学生に台北101や九份、夜市などを案内してもらった際に、台湾の文化に触れることが出来ました。特に、食べ物などの食文化も日本とは異なり、驚かされた点も多々ありました。また、観光している際に案内してくれた学生達と英語で色々な話をすることで、英語力を高めるだけでなく、自分から話しかけることの大切さを教えてくれました。これらは、日本では出来ないとても貴重な体験でした。



ポスター発表

台北科技大学と学術交流を経て、英語でのプレゼンテーションを体験するとともに、英語でのコミュニケーション、他の国の文化に触れるなど、多くの貴重な経験をすることが出来ました。これらのすばらしい経験を今後の人生にいかして、頑張っていきたいと思います。また、今春に台湾の学生達が来日し、学術交流を行います。幅広い知識を深めるとともに、日本の文化面に関しても有意義な交流会にしていきたいと思います。

学術交流会後の打ち上げ

台北科技大学にて

台北科技大学にて学術交流会後

研究活動紹介

運動と脳
～いつまでも健やかに～

環境共生学部　食健康科学科
准教授 松本 直幸

Profile
筑波大学大学院体育研究科 修了。
博士（医学）（大阪大学）
大阪大学、京都府立医科大学を経て、
2011年4月より現職

〈環境生理学研究室〉

私はこの20年ほどの間、霊長類を用いた神経生理学的研究に取り組み、大変興味深い知見を得てきました。今後、これまでの脳研究の経験を生かしつつ、運動という側面から人々の「身体」だけでなく「脳」の健康を維持し高める研究ができればと考えています。本稿では、まずこれまでの脳研究の成果の一部を紹介し、後半に本学での研究、これからの展望について紹介させて頂きます。

〈朝三暮四〉

今年も新入生を迎え、キャンパスが明るい雰囲気に包まれています。私が受験したセンター試験（当時は共通一次試験）では、数学で「米騒動」が起こり、試験中に嫌な汗をかいたのを思い出します。さて、試験問題を解くとき、みなさんはどのように取り組みますか？一問目から順番にという人もいるかもしれませんが、まず全体に目を通し、先に容易な問題を仕上げ、余裕を持った上で難易度の高い問題に挑戦する、そんな人も多いでしょう。一方、スポーツの場面を考えてみましょう。例えば経験の浅いテニスプレーヤーは最初から全力、途中で息切れして負けてしまうこともしばしば。ところが上級者は勝負どころの中盤を見据え、そこで優位に立てるようゲームを組み立てる。他にも、投資における収益の将来予測やダイエット中の生活改善計画など、私たちは目標達成に向けて様々な行動を選択するとき、予想される報酬（金銭、名誉、達成感など）に基づいて意志決定をしています。「朝三暮四」という故事をご存じですか？サルたちに「どんぐりを朝に三つ、日暮れに四つあげよう」というと、「それは少ない！」とサルたちは怒り出してしまった。そこで「では朝に四つ、日暮れに三つでどうだ、足りるか？」と聞くと、サルたちは大喜びしたという話です。つまり、目先の報酬にとらわれると全体のことに気付かないということです。ゲームに勝ち、富を得、ダイエットに成功するにも目標を見据え、二手先、三手先に有利な行動を選ぶことが必要です。

http://contest2004.thinkquest.jp/tqj2004/70237/t/tyousan.html

私たちの研究グループは、複数の選択肢の中から試行錯誤で正解を選ぶ探索行動と、一度見つけた正解を繰り返す行動を組み合わせた課題を日本ザルに学習させ、その時の中脳ドーパミン細胞の活動を記録しました。するとドーパミン細胞の活動電位の発射頻度は、今から行う行動の直後にもらえるであろう報酬の大きさではなく、その先でさらに得られる複数回の報酬をも含んだ積算報酬の大きさと相関していました。すなわち、ドーパミン細胞の活動の大きさは二手先、三手先の複数の報酬価値を表現していたのです[1)]。この成果は、長期的収益予測に基づいて意志決定と行動選択を行うという、意志決定の作動原理解明につながる重要な発見として注目されています[2)]。

〈生活活動の工夫を!〉

話題を変えましょう。私は生理学系科目以外に健康スポーツ科学系の科目も担当しています。また、食健康科学科の所属ですので、運動と栄養の両面から人々の健康を考えるには大変適した環境にいます。

「メタボ」、嫌な言葉ですね(笑)。内臓脂肪型肥満に加えて、高血糖、高血圧、脂質異常のうちいずれか2つ以上をあわせもった状態をメタボリックシンドロームといいます。心臓病、脳卒中あるいは糖尿病のリスクを低減するうえで、これを予防することは極めて重要です。そのためには食事で摂取エネルギーを抑制するだけでなく、運動により積極的にエネルギーを消費することも必要です。しかし、多忙で時間に追われる状況では、運動に時間を割くのは難しいでしょう。身体活動は「運動」と通勤通学、家事などの「生活活動」に分けられます。

実験室の様子:自転車運動時のエネルギー代謝量の測定

「生活活動」の中心は歩行です。そこで私たちは、もも上げとおもり負荷を組み合わせ、生活活動として実施可能な歩行様式について検討しました。リュックにおもりを入れ、それを背負って普通に歩く場合と、もも上げで歩く場合とで活動強度がどの程度異なるか調べました(図1)。すると、体重の20%の負荷を背負って普通に歩くよりも、おもりなしでももを上げる方が活動強度が高いことが分かりました。さらに、もも上げで

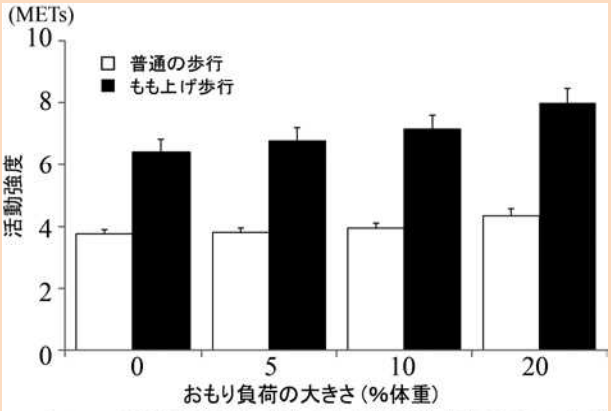


図1. METsは運動(活動)強度の単位であり、安静時代謝の何倍かを表している。普通歩行では体重の20%のおもりを背負ってもエネルギー消費はあまり増えないが、もも上げでは、おもりがなくとも通常より1.5倍のエネルギー消費が期待される。

体重の10%以上の負荷を背負うと非常にきつい運動となり、継続が困難であることも分かりました。「健康づくりのための運動基準2006」[3]で目標として掲げられる一日の身体活動量を普通歩行で満たす場合は約50分を要します。しかし、今回調べた体重の5%の負荷を背負ったもも上げ歩行では29分で満たすことが可能なのです!つまり、通勤などで持ち歩く書類や、買い物をした商品などをリュックで背負い、少しももを上げることを意識するだけで、かなりの運動量が稼げるのです。是非、みなさんも自分のライフスタイルに合わせ、「生活活動」での消費エネルギーを増やす工夫をされてみてはいかがでしょうか。

運動は「脳」の健康にとっても大変効果があります。近年、記憶の形成に重要な海馬の神経細胞は日々新生していることが分かってきました。しかも低〜中強度の運動によってそれは活性化されるのです。私は今後、この神経新生がどのような運動、栄養あるいはそれらの組み合わせによって修飾されるのかについても明らかにしていきたいと考えています。みなさん、活動的な日常生活を送ることで、生活習慣病の予防だけでなく、健やかな脳を維持していきましょう。

研究室の学生たち:平成24年度卒業研究発表会慰労会にて

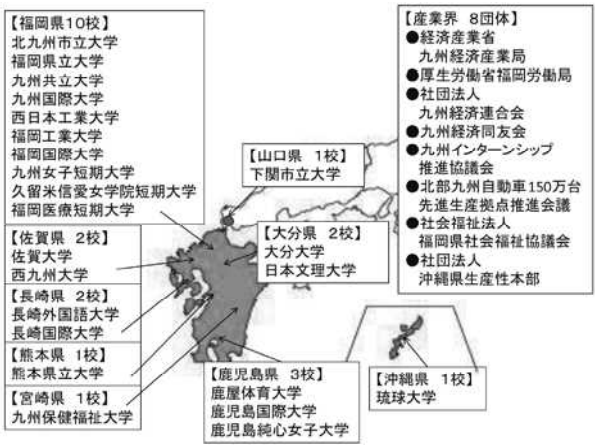
<文献>
1) PNAS 108: 15462-15467 (2011)
2) Curr Opin Neurobiol (in press) http://dx.doi.org/10.1016/j.conb.2012.11.012
3) 健康づくりのための運動基準 2006 〜身体活動・運動・体力〜 報告書. http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/undou02/pdf/data.pdf (2006)

大学の動き

文部科学省の補助事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に採択されました!

本学は、文部科学省が公募した「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に対し、本学を含む九州・沖縄地区の23大学でグループを形成して申請し、平成24年9月に採択されました。

今後は、補助期間が終了する平成26年度までに、産業界のニーズ収集や各種アンケートで得られる本学の教育活動への評価や諸情報の集約・管理・分析、キャリア教育の評価手法の開発等に取り組んでまいります。



●大学グループの構成と産業界との連携

「学生ビジネスプランコンテスト」アイディア賞を受賞

本学総合管理学部・黄在南教授の研究室の学生たちが、一般財団法人学生サポートセンター主催の平成24年度(第10回)「学生ビジネスプランコンテスト」において、アイディア賞を受賞しました。全国の大学生・大学院生から応募のあった102件のプランの中から選ばれたものです。受賞したプラン名は「地域密着!!『就活情報誌』〜ACCESSからSUCCESSへ〜」で、地元企業が低価格で情報を掲載できるフリーペーパーを作成し、就職活動において企業研究を行う人々に情報提供するという内容のものでした。

平成24年度環境共生フォーラムを開催しました

本学の中期計画の目標に掲げた、「特色ある研究の推進」の一環として、本年度より、「有明海・不知火海流域圏における環境共生型産業に関する研究プロジェクト」を創設し、3月2日に約120人が参加して、フォーラムを開催しました。

このフォーラムでは、前佐賀県副知事の川上義幸氏の「健全な水循環系の構築を目指して」と題する特別講演がありました。それに続き当研究プロジェクトに関わる本学科教員が、県内の企業及び自治体関係者の方々と活発な議論を展開し、環境共生型産業の振興へのアプローチについて共通の理解を深めました。

選書ツアー

図書館において「Library Lovers'キャンペーン」を開催

大学図書館の利活用促進に向けた「Library Lovers'キャンペーン」を昨年10月22日から11月19日にかけて開催し、「本で、旅する。−九州文学地図−」、「九州地区大学図書館貸出ランキング」など、学生・先生方が参加してのさまざまなイベントを行いました。

また、同時開催企画として、熊本県立大学同窓会紫苑会のご協力のもと、ボランティア学生による「選書ツアー」及び「旅する本」展示を実施し、参加した学生からは「選んだ本が誰かに読んでもらえるかと思うと、ワクワクします!」「とても楽しかった!」などの感想が寄せられました。

※活動の様子は、本学図書館クラブブログ「ぷくりぶ日誌」でご覧になれます。

CPDプログラム本格スタート!

熊本県立大学では専門職業人としての資質能力開発の機会の提供を目的としたCPDプログラムを、今秋より本格的にスタートさせました。

まず第1弾となる「戦後日本のあゆみとゆくえ」（全5回）では、『戦後日本外交史』（吉田茂賞受賞）をテキストとして、長期的な国際政治の観点も組み入れて、本書の編者である本学の五百旗頭真理事長が自ら講義を行いました。次に「看護職員の継続教育を考える」（全4回）では、各回に県外の有名講師を招き講演をお願いし、県内全域の看護職員の方々に受講いただきました。そして「課題解決能力に磨きをかける5日間」（全5回）では、主に自治体職員を対象に、ファシリテーションのあり方に対する理解を深めるため、グループワークや講義を展開しました。さらに「くまもとブランド塾2012」（全3回）では、主にブランドづくりに取り組む事業者の方々が県内外から参加され、最終日の相談会も熱気であふれていました。

CPD「戦後日本のあゆみとゆくえ」の様子

CPD「課題解決能力に磨きをかける5日間」の様子

後援会便り

4年次内定者による就職活動相談会の様子

後援会では、大学が実施している就職セミナーを支援しています。「4年次内定者による就職活動相談会」もその1つです。

キャンパスキャリアエンジェル（CCA）が企画運営するもので、3年生を対象とし、4年生10名が就職活動の相談を受けました。

約70名の学生が参加し、自分の就職活動へ繋げるため真剣に話を聞いていました。

※CCA･･･毎年10～2月、キャリアセンターにて学生の就職相談を受ける卒業後の進路が決定した4年生

後援会とは

●本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
●大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

後援会の事業　次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》
●就職対策講座（公務員試験対策講座、就職試験対策作文講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、秘書検定対策講座等）受講料の一部助成または開催経費の一部助成
●TOEIC® IPテスト開催の支援及び受講料の一部助成、各学部による就職支援事業開催経費の一部助成、資格取得者への助成　等

《学生活動支援事業》
●各サークルの活動費･白亜祭開催経費･全国大会出場経費等の一部助成
●学生用コピー機の設置、コピーカード販売
●学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置　等

《国際化推進事業》
●海外留学･研修期間に応じて渡航経費等の一部助成
●留学対策講座の受講料の一部助成　等

《教育研究助成事業》
●学生共同自主研究への助成
●国内学生大会等出場経費の一部助成　等

※途中年次であっても随時入会を受け付けています。
後援会事業をご理解いただき是非ご加入ください。

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、
地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

八田 尋乃

ELLA英語絵本読み聞かせ会

文学研究科　英語英米文学専攻　2年　八田 尋乃

「地域の子どもたちが楽しく英語に触れられる機会づくりを」という目的で始まったのが、ELLA英語絵本読み聞かせ会の活動です。ELLAとは、English Language and Literature Association（熊本県立大学文学部英語英米文学会）の略称で、英文科の教員・在学生・卒業生を会員とする学会組織のことです。私たち英語絵本読み聞かせグループもELLAが運営する活動の一部として、英文科だからこそ出来る、英語絵本の読み聞かせ会を行っています。

ELLA英語絵本読み聞かせ会は、小学1～3年生を主な対象とし、毎年度8月、10月、12月、3月に開催しています。開催時期に合わせ、ハロウィンやクリスマスに関する絵本の読み聞かせをしたり、英語を使った歌や手遊び、かるたゲームやじゃんけん列車などのアクティビティーを取り入れたりしながら1時間の読み聞かせ会を進めていきます。子どもたちを飽きさせないように工夫することはもちろんですが、私たち学生自身も仮装をするなどして楽しく活動しています。

読み聞かせ風景

平成23年度に発足したこのグループには、現在、英文科の学部生と大学院生を合わせた15名程度のメンバーがいます。各会の1ヶ月ほど前から週に2回程度のミーティングを行い、どんな絵本を読むか、どんな歌や手遊びを取り入れるかなどを話し合いながら準備を進めていきます。準備を進めていくうえでの大変さや、子どもたちに楽しんでもらえるだろうかと不安を感じることもありますが、実際に読み聞かせをしてみると、楽しそうな子どもたちの笑顔や、「また参加させたいです」などという保護者の方々からの感想をいただく度に、やってよかったと思えますし、次も頑張ろうという気持ちになれます。また、平成24年の12月には、英文科のブログを見ていてくださったある施設の方から依頼をいただき、出張で読み聞かせ会を行いました。学外での読み聞かせ会は、いつも学校でしている会とは一味違った新鮮さや達成感がありました。

今後も、子どもたちと一緒に楽しみながら、このELLA英語絵本読み聞かせの活動を通して地域に貢献することが出来ればと思います。

英単語を使った かるたゲーム

クリスマスのリース作り

ハロウィンの仮装をした
メンバーたち

熊本県立大学未来基金へのご協力に、心よりお礼申し上げます。

熊本県立大学未来基金につきましては、平成24年3月1日から平成25年2月28日までの間に、下記のとおり、延べ個人37名、5法人・団体等の皆様から総額9,635,000円のご寄附をいただき、これにより平成21年9月8日設立以来の基金総額は、92,407,255円（申し出分を含む）となりました。今年度は、熊本県立大学奨学金や平成24年11月17日に開催しました創立65周年記念国際シンポジウム等に活用させていただきました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

1.お名前・寄附金額の掲載を希望されたご寄附者

【個人】 100万円：五百旗頭 真　50万円：山口 郁代　5万円：川﨑 朝子　3万円：秋野 多喜子②
3万円未満：秋山 喜文②　金井 秋子②　熊部 祥子　野村 武

【法人・団体等】
平成24年度分奨学金として500万円：西部電気工業株式会社
平成24年度分奨学金として200万円・熊本県立大学創立65周年記念として50万円：熊本県立大学同窓会紫苑会

2.お名前のみ掲載を希望されたご寄附者

【個人】 稲留 征子　岩本 春美　尾田 清子②　黒木 誉之③　黒田 充②　境 久美子
坂本 元子　進野 マリコ　萩原 輝子　藤枝 房枝②　前川 嘉洋　矢加部 文子　安岡 澄子

【法人・団体等】
株式会社コスモホーム　株式会社冨坂建設

※お名前・寄附金額の掲載を希望されないご寄附者は個人16名でした。

なお、寄附金額別、五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。また○内の数字は、累積寄附回数です。

人事情報

■採用　（平成25年4月1日付）

〈文学部〉
日本語日本文学科　准教授　中井 賢一
英語英米文学科　教授　田﨑 權一

〈環境共生学部〉
居住環境学科　准教授　柴田 祐
食健康科学科　講師　吉村 英一
食健康科学科　助手　山元 涼子

〈総合管理学部〉
総合管理学科パブリック・アドミニストレーションコース
講師　川瀬 美穂
総合管理学科ビジネス・アドミニストレーションコース
教授　丸山 泰
総合管理学科ビジネス・アドミニストレーションコース
講師　本田 圭市郎

■退職　（平成25年3月31日付）

〈文学部〉
日本語日本文学科　教授　田中 宏尚
英語英米文学科　教授　徳永 紀美子
英語英米文学科　准教授　長嶺 寿宣

〈環境共生学部〉
環境資源学科　教授　篠原 亮太
居住環境学科　准教授　桑田 豪
食健康科学科　准教授　渡邉 純子
食健康科学科　助教　赤星 亜朱香

〈総合管理学部〉
総合管理学科パブリック・アドミニストレーションコース
教授　渡邉 榮文
総合管理学科　地域・福祉ネットワークコース
准教授　重永 康子

■就任　（平成25年4月1日付）

〈環境共生学部〉
居住環境学科長　教授　李 麗

おすすめの一冊

下流志向

内田樹 著　講談社文庫

総合管理学部
准教授 金井 貴

なぜ子どもたちは勉強しなくなったのか？

著者によると勉強しない原因は不注意や怠惰ではなく、むしろ「うっかり教師の話を聞いてしまった」ということが無いように子どもたちが努力していること、であるらしい。一見奇妙な理屈だが、「利益に見合わないことをしてはならない」という不文律を子どもたちは律儀に守ろうとしている、と言い換えれば分かりやすいのではないだろうか。上記の不文律を教育や労働にあてはめるとどうなるのか、という視点が興味深い。

本書は講演録の形をとっているためかとても読みやすい。ただ読みやすいがゆえに著者の主張を無批判に受け入れたくなるのが問題でもある。本書の理屈が本当に正しいかどうかは意見の分かれるところだろうが、社会の変化や世間の空気が勉強しない子どもたちを作り出しているのではないか、という視点から「勉強しない・働かない」という問題を考える良いきっかけになると思う。

熊本県立大学アーカイブズ

和田巖足（いずたり）書簡：「皷（つづみ）が瀧（たき）をよめる」長歌並びに消息

和田巖足は江戸時代後期の国学者、細川藩士。天明7年（1787）生。万葉調の和歌をよくし、天性磊落、独特の筆法を以て知られる。八代御城附組脇の任にあったが、嘉永2年（1849）、故あって佐敷御番を命ぜられ、安政6年（1859）に73歳で没するまで彼地にあった。『日本書紀』にも見える球磨川河口の歌枕「水島」が新規の干拓地に吸収されんとした折、八代在勤であった巖足の異議により堤の線引が変更され、島としての景観が保持されたとの逸話がある。

熊本市西部金峰山麓に位置する「皷が瀧」は、「水島」同様に古来より知られる肥後の歌枕である。「こしぼその すがるな〉こし 玉くしげ」に始まる長歌は、その晦渋とも見える書体と相俟って幽谷の風響を伝え、余すところがない。消息本文には、本長歌をさらに「蚯蚓（みみず）様」に「清書」したものを後日に届ける旨の記載があるが、本書簡からも巖足の書風は十分に窺われよう。

本資料は、昨年11月、『和田巖足と其の家集』の著作がある熊本出身の国文学者、弥富破摩雄氏のご遺族より寄贈を受けたものである。全文の翻刻も同書211頁に備わる。

解説：文学部　日本語日本文学科　准教授　米谷隆史

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502（住所記載不要）
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765　E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学
〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL 096(383)2929(代)
http://www.pu-kumamoto.ac.jp/

再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK
この印刷物は大豆インキを使用しています